ティーマット
TMATニュースダイジェスト
2024年6月30日発行

発行 特定非営利活動法人（NPO 法人）TMAT
〒102-0074
東京都千代田区九段南 1-3-1 東京堂千代田ビルディング 14F
Tel 03-3263-8136　Fax 03-5214-6664
Email info@tmat.or.jp
制作 一般社団法人徳洲会 広報部

TMAT News Digest
Non-Profit Organization
Medical Assistance Team TMAT Non-Profit Organization
No.16
www.tmat.or.jp

令和6年能登半島地震

現地ニーズふまえ長期活動

リレー形式で14隊94人の隊員派遣

NPO法人TMATは、2024年1月1日に発災した令和6年能登半島地震により、甚大な被害を受けた石川県輪島市で、災害医療活動を行った。発災直後に情報収集を開始し、同日に先遣隊の派遣を決定。以降、2月13日まで1カ月以上にわたり、先遣隊から本隊までリレー形式で14隊、延べ94人の隊員を派遣し、合計703人の診療を行った。主に同市内にある避難所「輪島市ふれあい健康センター」を活動拠点とし、他の支援団体とも協働しながら、診療や介助、ゾーニング（区域分け）、環境整備などに尽力。近隣の避難所の巡回診療なども行った。（4面に写真グラフ）

施設内を巡回して避難者の体調に気を配る

令和6年能登半島地震は元日の午後4時10分に発生。石川県能登地方で最大震度7を記録し、家屋の倒壊や焼失、津波による浸水などで甚大な被害をもたらした。内閣府によると、1月11日時点で死者200人超、負傷者500人超、避難者2万6,000人超とされたが、被害状況の全容は明らかになっていなかった。

とくにライフラインへの影響が大きく、地域によっては断水や停電が続き、各地にアクセスするための道路も陥没や沈下、地割れ、土砂崩れなどでスムーズに通行できず、支援や復旧が遅れる原因となった。積雪で道路の状態が見えなくなれば徐行もできないなど、天候の影響も大きかった。

こうしたなか、TMATは発災直後に緊急災害対策本部を立ち上げ、先遣隊の派遣を決定。1日午後11時に、1班として隊員4人が現地に向け救急車両で出発した。翌2日には2班3人、3日に3班3人、5日に4班6人と、各地から隊員が出動した。

1班は2日に石川県庁を訪れた後、DMAT（国の災害派遣医療チーム）活動拠点本部がある七尾市の能登総合病院に到着。輪島市に向かう道路状況の確認を依頼され、車で向かったが、悪路のため通常1時間程度で行けるところを5時間以上要した。

同本部に状況を報告した後、輪島市役所職員から避難者の健康状態のアセスメント（評価・分析）要請を受け、市役所周辺に点在する避難所の巡回と情報収集を開始。他の避難所に比べ規模が大きい輪島市ふれあい健康センターでの医療ニーズが高いと判断し、同センターを活動拠点にすることを決めた。

3日に能登地方の別の場所で情報収集を行っていた2班と3班が金沢市で合流した。同日、同センターの一角に仮設診療所の開設許可を得たことで、TMAT事務局は本隊の派遣を決定。各チームは1週間を目安に、後続チームにバトンをつなぐリレー形式で支援を継続した。

機動力・対応力に現地から驚きの声

TMATは診療面だけでなく避難所の運営もサポート。同センターに立ち上げた仮設診療所を中心に、救急を含め24時間体制で診療にあたるのはもちろん、できるだけ効率的な運用ができるように、施設内の環境整備にも尽力した。

同センターでは断水が続き、手洗いや入浴ができないことから、清掃やゾーニングを行い、感染予防に努めるとともに、要介護者の専用スペースを設けて迅速に支援できるように工夫。発災から1週間ほどが経過し、施設内で感染症が増えてくると、すぐにゾーニングを変更した。

支援に入っている同センターや市役所の職員、地元診療所の医師らの負担軽減にも努めた。仮設診療所の当直とは別に、毎日、午前0～4時は避難者を巡視する職員の代わりを務めたり、昼夜問わず、施設内を巡回して避難者の体調を確認したりした。近隣の避難所の巡回診療も継続した。

夜間には駐車場を巡回し、車中泊の方にも配慮。声をかけ、エコノミークラス症候群（静脈血栓塞栓症）や一酸化炭素中毒を防止するために、弾性ストッキングの案内や車両のマフラーチェックを行った。

東京都職員らと力を合わせ段ボールベッドを組み立てる

TMAT理事で先遣隊1班の髙力俊策医師（湘南藤沢徳洲会病院院長補佐）は「現地では、行政職員や地元の医療従事者の方々が自らも被災者でありながら、不眠不休で避難者の方を支えていました。TMATは、こうした方々をサポートする役割も担っています」と強調する。

初めて段ボールベッドが届いた時も、予定より大幅に遅い時間だったが、すぐに組み立てて、避難者の一部に提供。最後に隊員が一列に並び、代表して先遣隊4班の坂元孝光医師（福岡徳洲会病院総合診療科部長）が「これからも頑張りますので、よろしくお願いいたします。ご協力ありがとうございました」と挨拶すると拍手が起こった。

こうした支援は各関係者と連携して実施。毎日、同センターでは保健師らと、市役所に設置された医療調整本部ではDMATや他の支援チームと、情報共有・意見交換を行っている。

同市健康福祉部子育て健康課の村田悦子・統括保健師は「TMATの機動力・対応力に驚いています。発災から1週間が経過し避難所運営のフェーズが変わっても迅速に対応いただいたり、他の団体との調整もうまく行っていただいたりと、本当に心強く感じています。いろいろな職種の方が来てくださることも助かっています」と謝意を表す。

輪島市保健医療福祉調整本部で会議（左から3人目が福島TMAT理事長）

地元の「ごちゃまるクリニック」の小浦友行院長は、先遣隊1班で最も長く滞在した久保健一看護師（湘南大磯病院看護師長）が帰任する際、「皆様がすぐに来てくださったおかげで本当に……」と切り出すと、涙で言葉を詰まらせた。

坂元医師は今回の災害について「恐らくアクセスの問題があるのかもしれませんが、今まで経験した支援の時よりも復興のスピードが遅い。また、高齢者が多いことも感じます」と指摘した。

13日夕方には本隊第2陣が合流。14日に活動を開始し、先に現地入りしていた本隊臨時チーム（宇治徳洲会病院スタッフで編成）とともに、診療や介助、ADL（日常生活動作）や持参薬の確認など避難者への対応をはじめ、施設内のゾーニングなど環境整備などに尽力。DMATやDPAT（災害派遣精神医療チーム）、歯科医師会や薬剤師会、東京都職員など、外部の支援者との連携も継続中だ。

さらに、現地はいまだアクセスが悪く物資の調達もままならないため、TMAT事務局は看護師中心の本隊臨時チームを派遣。水や食料、医薬品、医療材料などを補給するとともに、現地支援活動を行った。（2面に続く）

令和6年能登半島地震支援活動の動き

1月1日	午後4時10分、石川県志賀町でマグニチュード7.6、最大震度7の地震発生。直後からTMAT事務局が情報収集開始。午後9時頃、現地ニーズ調査のため先遣隊3チームの派遣を決定。午後11時頃、先遣隊1班4人が湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）から金沢市へ出発
1月2日	午前5時頃、先遣隊2班3人が東大阪徳洲会病院から金沢市へ出発。先遣隊1班は石川県庁に到着し、情報収集を開始。輪島市に移動して同市役所や周辺の避難所を巡回し、避難者の健康状態のアセスメントや情報収集を行う。2人を診療。午後8時頃、先遣隊3班3人が四街道徳洲会病院（千葉県）から金沢市へ出発
1月3日	先遣隊2班、3班が金沢市内で合流、輪島市へ向かう。1班は輪島市内の避難所などを巡回。1～3班が合流した後、午後4時半頃、輪島市ふれあい健康センター内にTMAT仮設診療所の設置開始の許可を得る。12人を診療
1月4日	仮設診療所チーム、周辺避難所巡回チームの二手に分かれて診療活動を開始。同センター内に要支援者専用避難部屋（福祉避難所）を設営。33人を診療
1月5日	先遣隊4班6人が神戸徳洲会病院から輪島市へ出発。同センターでは診療活動を継続、55人を診療
1月6日	福祉避難所にナースステーションを設置。午前5時半頃、震度5強の余震発生、臨時で施設内外の巡回実施。ポータブルトイレを搬入、福祉避難所に2台設置。40人を診療
1月7日	本隊第1陣6人が到着。49人を診療
1月8日	62人を診療
1月9日	ADL低下予防などを目的に、ラジオ体操を開始。段ボールベッドを60台搬入。69人を診療
1月10日	近隣の小学校でゾーニング指導などを実施。本隊宇治チーム6人が到着。48人を診療
1月11日	順次帰任していた先遣隊がすべて撤収。同センター、輪島消防署などの環境調整を実施。33人を診療
1月12日	36人を診療。支援活動のためのクラウドファンディングを開始
1月13日	本隊第2陣6人が到着。26人を診療
1月14日	本隊第1陣が活動終了。30人を診療
1月15日	本隊宇治チームが活動終了。四街道臨時チーム5人が到着。15人を診療
1月16日	14人を診療
1月17日	14人を診療
1月18日	本隊第3陣6人が到着。14人を診療
1月19日	本隊第2陣、四街道臨時チームの一部が活動終了。19人を診療
1月20日	本隊第2陣、四街道臨時チームが活動終了。15人を診療
1月21日	12人を診療
1月22日	本隊第4陣8人が到着。7人を診療
1月23日	本隊第3陣が活動終了。6人を診療
1月26日	本隊第5陣9人が到着
1月27日	本隊第4陣が活動終了
1月30日	本隊第6陣6人が到着
1月31日	本隊第5陣が活動終了
2月1日	福島安義TMAT理事長と事務局が現地視察のため同センターを訪問
2月3日	本隊第7陣7人が到着
2月4日	本隊第6陣が活動終了
2月7日	本隊第8陣8人が到着
2月8日	本隊第7陣が活動終了
2月12日	撤収のための臨時チーム4人が到着
2月13日	現地での災害医療活動を終了

ご挨拶

いつ何時でも被災した方々のため活動できるように準備を怠りなく

NPO法人 TMAT理事長 福島（ふくしま） 安義（やすよし）

2024年は、年明け早々に能登半島地震が発生しました。複雑な地形をもつ地域であり、また、津波も起こり、家屋の倒壊のみならず、孤立集落もできるなど、複雑な様相を呈した大きな地震でした。

TMATとしましては、1月1日の地震発生と同時に隊員派遣の準備をし、同日、先遣隊が現地に向かいました。道路の崩壊などがあり、現地に入るのに苦労しましたが、2日に石川県輪島市に到達することができ、翌日には輪島市ふれあい健康センターに避難している方々の健康管理を中心に医療支援を行いました。以後、同センターを拠点として、約6週間、活動を継続しました。

能登半島は、伝統的な日本家屋が多い、歴史ある地域であることに加え、アクセスは一般道路が中心で、上水道などのライフラインも破壊されたことから、復旧が遅れています。緊急支援活動は終了しましたが、引き続き、地元の関係団体と連携し、必要な支援を継続していく方針です。

私たちTMATは、災害が起こらぬことを願っていますが、いつ何時でも被災した方々のために、活動できるよう準備を怠りなくしておくよう努めています。今後とも皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

（1面から続く）

18日に合流した本隊第３陣のチームリーダーである鈴木裕之医師（福岡徳洲会病院救急センター長）は、「経験則では発災から3週間ほど経つ頃には地域の医療機関などに引き継ぎ、支援団体は撤収する時期を迎えますが、地元の診療所の再開が一部にとどまっていたり、介護施設も大きな被害を受けていたり、上下水道の復旧に時間がかかっていて物流も滞っています。もともと高齢の方々が多い地域であるため、避難生活中の急変も多く、人手が足りず被災地支援が必要なフェーズが続いています」と話す。

TMAT協力施設	人数
福岡徳洲会病院	17
四街道徳洲会病院	11
宇治徳洲会病院	8
神戸徳洲会病院	8
岸和田徳洲会病院	4
湘南藤沢徳洲会病院	4
松原徳洲会病院	4
八尾徳洲会総合病院	4
湘南鎌倉総合病院	3
仙台徳洲会病院	3
成田富里徳洲会病院	3
生駒市立病院	2
湘南大磯病院	2
東大阪徳洲会病院	1
出雲徳洲会病院	1
宇和島徳洲会病院	1
山形徳洲会病院	1
共愛会病院	1
古河総合病院	1
静岡徳洲会病院	1
千葉徳洲会病院	1
中部徳洲会病院	1
徳之島徳洲会病院	1
南部徳洲会病院	1
野崎徳洲会病院	1
武蔵野徳洲会病院	1
介護老人保健施設 武蔵野徳洲苑	1
愛心訪問看護ステーション	1
TMAT	4
無所属	2

職種内訳	人数
医師	9
看護師	52
薬剤師	6
救急救命士	13
理学療法士	7
作業療法士	1
事務	6

高齢者などを受け入れ 実質的な福祉避難所に

同センターは3階建ての公共施設で、TMATが担当している1階の避難所は、要介護高齢者など支援を必要とする避難者を受け入れる実質的な福祉避難所となっている。2階、3階はほぼADL自立の方々が入る一般の避難所という位置付けだ。

TMATは1階に仮設診療所を開設して外来診療を行うとともに、2、3階を含めた避難所内の健康管理を行ってきた。同センター内での処置が難しい急変が発生した場合には、基幹病院である市立輪島病院に搬送。感染症発症時にはフロアごとにゾーニングを行い拡大防止に注力した。地域の一部診療所が再開したことなどから、仮設診療所による外来診療は1月末で終了した。

避難所は多くの支援団体と協働して運営。診療再開した「ごちゃまるクリニック」の小浦院長が、1月下旬から避難所内の体調不良者への往診を実施するなど緊密に連携した。22日時点での避難者は約150人に上り、1月末時点でも100人以上が身を寄せていた。

1階避難所は高齢の避難者が多く、既往症のある方やADLが低い方、要介護の方、その他体調面で不安のある方が生活している。ふだんのケアやさまざまな介助に加え、体調悪化に備えてTMATの看護師が常駐。夜間も他団体の協力を得て２人夜勤体制を継続し、さながら“病棟„の様相を呈していた。

急変事例も少なくない。たとえば、コロナ陽性で2階の感染隔離室にいた避難者の方は血中酸素飽和度（SpO_2）が低下、心不全の既往がある1階のコロナ陽性者はSpO_2低下に加え意識障害と血圧低下など。総じて感染症を含む呼吸器系の疾患や循環動態の悪化（高血圧など）、その他の慢性疾患の増悪などが見られた。日中の時間帯だけでも日に4～5件の救急搬送を行うこともまれではない。2、3階の避難者のなかにも急変予備軍が含まれているため気が抜けない状況が続いた。

とくに、感染症を発症した要介護の避難者を受け入れられる避難所は限られていたため、同センターが果たす役割は大きい。加えて、大規模な避難所となっている学校などは授業再開の動きがあり、避難所の集約が想定されていた。こうしたなかで心配されるのが要支援者の行き先だ。医療・介護的な評価とケアが必要な場合、一般の避難所では対応が難しく、ケア体制が構築されている同センターは当面、こうした方々を受け入れる重要な避難所であり続けることを求められた。

こうしたさまざまな要因が重なり、長期的な支援が必要となっていたため、TMATは22日に第4陣、26日に第5陣、30日に第6陣、2月3日に第7陣、7日に第8陣が、それぞれ合流し活動した。なお、第6陣以降は医師を含まない看護師や理学療法士を中心としたメンバーを派遣し、要介助者のみを24時間体制で支援継続した。

現地活動終了するも 継続的な支援を約束

最後の要介助避難者を見送り、現地活動を終了

現地の医療・介護活動が再開してきて、1階の避難所内のすべての避難者が地元介護施設などへ移動したことで、TMATは活動終了を決定。12日に野口幸洋・事務局長と撤収班の4人が、同センターに入り第8陣と合流した。

野口・事務局長と第8陣のリーダーを久保看護師から引き継いだ村上歩紀看護師（宇治徳洲会病院看護部）は、輪島市保健医療福祉調整本部関係者会議に出席し、現地活動の終了を報告。さらに、同調整本部本部長である刀祢真裕美・輪島市健康福祉部長に、活動記録と仮設診療所で診療した703件のカルテを手渡した。

同センターでは13日に最後の要介助避難者を見送った。その後、同センター長である中山和子・輪島市子育て健康課長に加え、活動開始当初から協力関係にある地元の「ごちゃまるクリニック」、石川県庁などに挨拶をし、現地活動を終了した。

野口・事務局長は「今後は緊急的な支援ではなく、長く継続的な支援が必要になります。一つひとつの団体が、それぞれの力だけで活動するには限界があるため、市を中心に必要なリソースを考えてもらい、それに対しいろいろな団体が助け合って支援を続けていけたら良いと思います。TMATも引き続き協力していきます」と抱負を語った。

EMT認証へ展開訓練 模擬診療で手順確認

TMATは四街道徳洲会病院(千葉県)で展開訓練を行った。WHO(世界保健機関)のEMT(緊急医療支援チーム)認証を取得するプロセスの一環で、TMATが申請しているカテゴリー「Type 1 Mobile」(1日50人程度の移動型診療)を想定して実施。

訓練ではTMATが所有する資機材を用い、大型のテントなどを建てて隊員同士で医療者・模擬患者役に分かれ、一般診療、感染症治療、医療事故などへの対応を確認。診察を行ううえでの物品の配置や人の流れなどもチェックした。海外での災害に備えた診療録記載、MDS(国際標準の診療報告システム)の入力トレーニングも行った。

参加した隊員からは「実際に運用するテントを使うことで、イメージが湧きました」、「診察中に診療録を書く事務担当者を配置してはどうですか」といった声が上がっていた。野口幸洋・事務局長は「スムーズに診療できるよう訓練を繰り返し、EMT認証の模擬審査の早期受審を目指します」と意欲的だ。

実際の医療現場を想定し診察の流れを確認

テントを組み立てる隊員

能登半島地震で活動報告会

活動報告会はWEBページで視聴可

経験共有し次に備える

先遣隊・本隊・後方支援の役割説明

TMATは令和6年能登半島地震活動報告会をWEB開催した。同災害での活動内容、今後の課題などを共有するのが狙い。先遣隊として被災地に赴いた3人の隊員が先遣隊の役割や、高齢者を中心とした要配慮者を同じフロアに集めて支援活動を進めたことなどを発表。とくにゾーニング（区域分け）や隔離室の設置など環境整備を行い、感染対策に力を入れたことを示した。先遣隊として出動した村田宇謙医師（湘南鎌倉総合病院外科部長）は「感染対策はTMATだけでは対処できないことも多く、避難者の方にも協力してもらいながら進めました」と振り返った。

本隊の活動については隊員3人が報告。薬剤師が避難所の保健師らと協力して地域の薬局の開設状況を調べ、スムーズな調剤につなげたり、理学療法士が要配慮者を対象にリハビリテーションを行い、ADL（日常生活動作）の向上に取り組んだりと、職種の専門性を生かした活動を行った。村上歩紀看護師（宇治徳洲会病院看護部）は活動終了時に言及、「他の支援団体に避難所の感染対策や環境整備の方法を指導し、TMATの活動終了後も避難者の方が安心して生活できるよう体制を整えました」と説明した。

各隊への後方支援については池田美希看護師（四街道徳洲会病院看護部）が報告。院内に設置しているTMATの資材倉庫から必要な物資を選び、被災地に発送した流れを紹介し、「被災地では医療資器材の管理方法に混乱が生じたこともありました。TMATとして改善策を講じ、次の支援活動に備えます」とまとめた。

モロッコ地震へ先遣隊 派遣し山岳地域で支援

現地の被災者に支援物資の毛布を手渡す久保山看護師

TMATは2023年9月9日午前7時過ぎ（現地時間8日午後11時過ぎ）に発生した地震で、甚大な被害が出た北アフリカのモロッコ王国に先遣隊を派遣した。発災直後から情報収集を開始し、11日に先遣隊の派遣を決定。12日朝、隊員の坂元孝光医師（福岡徳洲会病院総合診療科部長）と久保山貴史看護師（同院看護部）が羽田空港を出発した。

２人は13日に震源地から約70㎞離れた都市マラケシュに到着し、本格的に活動を開始。アミミズという山岳地域で被害が多いと聞いたため、調査に赴くと大規模な建物の崩落などを確認したほか、場所によっては小規模なテント村が設けられ、被災者から衛生面（トイレやシャワー）に関する訴えが寄せられた。翌日には、他国の支援関係者とアミミズから南西に車で40分ほどの山岳地域を訪れ、テントの設営に協力したり、支援物資のサポートをしたりした。

支援ニーズを調べるなかで、①医療物資の不足などは見られるものの、急性期の医療ニーズはきわめて低い、②被災地が山岳地のため物資支援が行き届いておらず、とくにこれから冬を越すための物資がかなり不足している、③現地在住の日本人コミュニティメンバーと連携することで、物資支援ができる体制にある――との理由から、現地派遣を終了し、ニーズがきわめて高い物資支援に切り替えることを決定。

物資支援をサポートするだけでなく、TMAT自ら物資も支援し、冬の寒さ対策として毛布や手袋などを購入して被災地の方に手渡した。先遣隊は18日に帰国。継続的な支援を目的に、クラウドファンディングも実施した。

支援物資を手渡す坂元医師（左）

日本災害医学会

TMATが8演題発表

京都に災害医療の叡智を結集

国際医療支援の課題など報告

第29回日本災害医学会総会・学術集会が2024年2月22日から3日間、京都市で開かれた。テーマは「叡智の結集－すべては被災者のために－」。TMATは8演題を発表した。パネルディスカッション、口演（口頭発表）を中心に紹介する。

合田医師（左から2人目）は来日してセッションに参加したトルコの保健省関係者と撮影

TMATの国際災害医療支援について説明する村田医師

野口・事務局長はTMATの活動を通じて海外で災害医療支援を行う際の課題を報告

ポスター発表を行う（左の写真から）阪木・事務局員、坂口薬剤師、柳川薬剤師、坂元医師

パネルディスカッションでは合田祥悟医師（札幌東徳洲会病院救急集中治療センター医長）が「NPO法人TMATによるトルコ・シリア地震での現地活動」をテーマに発表した。「トルコ大地震」と題し、同学会の国際委員会が企画したセッションでトルコの保健省関係者も来日し出席した。

合田医師は、はじめにTMATを紹介。理念や活動実績を示し、現在は世界保健機関（WHO）のEMT認証（Type1mobile）を目指していることを説明した。そのうえで、2023年2月に発生したトルコ・シリア地震での活動に言及。発災直後の2月8日～ 3月1日までトルコのバーチェなどに総勢22人の隊員を派遣し、トルコ国立医療レスキューチーム（UMKE）と活動しながら、延べ500人超の患者さんを診療したことを示した。

合田医師は活動を振り返り、「うまくいったこと」として、UMKEとの協力体制の構築、UMKEの負担軽減、シフト作成による隊員の体調管理、通訳を介した円滑なコミュニケーション、バーチェの病院再建支援、世界最速のMDS（国際標準の災害診療記録）提出・登録を指摘。課題には、民間飛行機での移動による輸送、活動エリアの選定、フォローを目的とした外来、日本の治療スタンスとの違いなどを挙げながらも、「今後も柔軟性を生かしたチームでありたい」と締めくくった。

一般演題のうち、口演では村田宇謙医師（湘南鎌倉総合病院外科部長）が「NPO法人TMATによる国際海外医療の変革について」と題し発表。TMATの歴史や活動内容を示し、最近の活動として23年に発生したトルコ地震で現地に赴いて支援した様子を説明した。

また、国際災害医療支援の潮流としてWHOのEMT認証にふれ、TMATはType 1 mobileの認証取得を目指していること、その一環で22年度のEMT global meeting に参加したことなどを紹介。いつでも海外で活動できる準備を進めていることを強調し、「今後も柔軟性を重視して国内外問わず災害医療の質を担保できるチームでありたい」と意欲を見せた。

野口幸洋・事務局長は2演題を発表した。「2023年トルコ・シリア大地震医療支援活動から見えた課題」と題する演題では、23年2月6日に発生したトルコ・シリア大地震でTMATがトルコに医療支援チームを派遣した時の課題を報告。最終的に16日間で500人超を診療したものの、派遣当初は活動許可が得られなかったことを明かし、海外での国際的な医療支援活動には「EMT認証は必須」と指摘した。

その反面、「EMTの大規模化が進み、TMATのような小規模NGOの立場が難しい状況にあると感じる」とも吐露。それでも、「災害現場では小規模NGOだからこそ必要とされる場面が多々ある」とし、「これがNGOの良さと考えています」と強調した。

もう1演題は「ウクライナ危機に対するモルドバ共和国での活動事例」がテーマ。22年2月以降のウクライナ危機に対して、TMATはモルドバNGOと連携し、22年4月～ 23年7月までに約600人のウクライナ避難民への生活物資、ウクライナ国内4カ所の地域の病院に医薬品を支援した。

野口・事務局長は、「紛争による難民医療支援を当事国以外で行う難しさがあった」としながらも、NGO のメリットを生かして、医療や生活に関連する物資支援に切り替え支援活動が継続できたことは「一つの成果」と強調。TMATにとって初の試みだったが、今後の支援活動の選択肢として検討していく意向を示唆した。

ポスター発表は4演題。演者と演題タイトルは次のとおり。▼阪木志帆・事務局員「病院防災研修の効果」▼坂口結斗薬剤師（中部徳洲会病院薬剤部副主任）「トルコ地震における医療活動報告－TMAT薬剤師としての立場から－」▼柳川拓哉薬剤師（四街道徳洲会病院薬剤部）「災害医療における定温運搬装置を用いた冷所保存医薬品の温度管理」▼坂元孝光医師（福岡徳洲会病院総合診療科部長、熊本大学医学教育部博士課程）「モロッコ地震におけるTMATの活動報告」

国内・国際・病院防災3コース トレーニング実施

能登半島地震派遣隊員らも講義

TMATは2024年1月20、21日、一般社団法人徳洲会東京本部で災害地の対象を国内に絞った1日研修である国内災害医療支援トレーニングコース（国内コース）、海外支援特化型の1日研修である国際（海外）災害医療支援トレーニングコース（国際コース）を開催した。各コースを修了すると、それぞれTMAT隊員としての活動参加要件を満たすが、国際コースは国内コースを修了していなければ受講できない。

両コース合わせて全国から75人の多職種が参加。TMAT理事の髙力俊策医師（湘南藤沢徳洲会病院院長補佐）をはじめ、令和6年能登半島地震で支援活動を行ったTMAT隊員らが中心となり講師を務めた。受講者は座学と机上訓練で、TMATの活動実績を学び、災害発生時の対応をシミュレーションした。

また国内コースは23年9月10日に福岡徳洲会病院、10月21日に中部徳洲会病院（沖縄県）、24年1月14日に生駒市立病院（奈良県）、3月16日に羽生総合病院（埼玉県）でも実施した。病院職員が有事の際の対応方法を習得し、院内の防災意識を高める病院防災コースは23年7月1日に吹田徳洲会病院（大阪府）、8月18日に中部徳洲会病院、9月9日に大隅鹿屋病院（鹿児島県）、10月6日に日高徳洲会病院（北海道）、11月18日に榛原総合病院（静岡県）、12月2日に大垣徳洲会病院（岐阜県）、24年2月1日に出雲徳洲会病院（島根県）で開催した。

国際コースのプログラム終了後、全員が修了証を受け取り記念撮影

大地震の発生を想定

多機関連携訓練に参加

搬送された模擬傷病者の初期対応を行うTMAT隊員

野外病院運用などシミュレーション

TMATは大規模災害発生時に多くの支援団体が連携し、迅速かつ的確に支援活動を行えるようにするため、第4回多機関連携災害時医療救助訓練に参加した。2023年12月16日から2日間、広島県神石郡神石高原町内で開催、主催はピースウィンズ・ジャパン。

マグニチュード7.8の地震発生を想定し、フィールドホスピタル（野外病院=FH）の設営・運用や多数の傷病者を診療するシミュレーションを行った。TMATからは医師、薬剤師、調整員が各ひとり、看護師3人が参加し、トリアージ（重症度・緊急度選別）エリアや薬局、指揮本部、診療ブースの支援を行った。

参加した久保山貴史看護師（福岡徳洲会病院看護部）は「ひとつの支援団体だけでは、限界があります。多機関で連携することの重要性を、あらためて感じることができました」、吉川瑞帆薬剤師（四街道徳洲会病院薬剤部）は「臨機応変に対応できるように、薬剤の知識をもっと深めていきたいです」と感想を漏らしていた。

訓練には多数の団体が参加

湘南鎌倉医療大学被災地ツアー

災害医療を学生に啓発

TMATは2023年9月14日から2日間、湘南鎌倉医療大学（神奈川県）の学生を対象に、東日本大震災被災地スタディツアーを実施した。東日本大震災で被災した医療機関や施設などを訪れ、災害時の状況や災害医療の内容などを学ぶのが目的。同大学の国際医療・災害医療サークルとボランティアサークルの2団体から8人の学生が参加した。

一行は、仙台徳洲会病院、震災遺構（震災の脅威や教訓を伝えるために保存された建物など）の門脇小学校、宿泊先の南三陸ホテル観洋などで当時の被災状況や震災に関する講義を受けた。また野口幸洋・事務局長が震災当時のTMATの支援活動を説明した。学生からは「現地で見たことを他のサークルメンバーや家族にも伝え、防災意識を高めたい」など感想が聞かれた。

仙台看護専門学校で特別講義も

仙台徳洲看護専門学校の卒業生でTMAT隊員の村上歩紀看護師（宇治徳洲会病院看護部）は11月28日、同校で災害看護をテーマにした特別講義を行った。

村上看護師は西日本豪雨災害（18年）、トルコ・シリア大地震（23年）など被災地での実体験に基づきレクチャー。「災害看護は救急の経験が必要と思われがちですが、災害の種類や現場に入るタイミングなどで、求められる医療ニーズは異なるため、外来でも病棟でも所属部署を問わず日頃の業務経験が生かせます。ぜひ災害看護に挑戦してほしいです」と呼びかけた。学生からは「海外でも活動できるように外国語の習得も頑張ります」といった感想が上がっていた。

野口・事務局長が湘南鎌倉医療大学の学生に講義

令和6年能登半島地震

写真グラフ特集

TMAT奮闘の全貌

2024年元日、主に石川県の能登半島を襲った巨大地震にTMATは即応、被災地の輪島市を中心に災害医療活動を活発に展開した。その一端を写真で振り返る。　**（1面に関連記事）**

輪島市を中心に災害医療活動を展開

活動拠点の近くには災害の生々しい爪痕（写真は輪島朝市）

活動拠点の輪島市ふれあい健康センター。最大700人程度の避難者を受け入れ

診療看護師も活躍

深夜に見回り、車中泊の車で排ガスが逆流していないかマフラーを確認

航空自衛隊員の協力も得て、段ボールベッドを一緒に組み立てる

些細な変化を見逃さず避難者の体調管理に尽力

ADL低下など健康不安のある3階の避難者を1階に車いすで移動

力を合わせて段ボールベッドを設置

体調不良を訴える避難者を仮設診療所で診察

継続的な支援活動のため物資を補給

第6陣メンバーの荒木伴宏看護師（福岡徳洲会病院看護師長）から状況を聞く福島理事長（右）

地元のごちゃまるクリニックの小浦友行院長がTMATの支援に対し謝意を表す

医療調整本部がある輪島市役所にも震災の傷跡が生々しく

発災から1カ月過ぎても火災の臭いが漂う輪島朝市通り

隊員たちは顔を合わせると、すぐに打ち合わせを開始

活動終了

刀祢真裕美・輪島市健康福祉部長（左）に活動記録と703件のカルテを手渡す

中山和子・輪島市子育て健康課長（中央）に現地活動終了の挨拶

本隊第8陣と撤収班が現地活動終了の前夜に最後のミーティング

最後の要介助避難者の移動準備

撤収前に避難所をきれいに清掃

本隊第8陣と撤収班が輪島市ふれあい健康センターのスタッフと記念撮影

ご協力のお願い

TMATは皆様からのご支援をもとに精力的に活動しています！ご協力をお願いいたします!!

1995年の阪神・淡路大震災での活動を契機にスタートしたTMATは、世界の人々の生命と健康を守るため、災害医療支援をはじめ総合的な医療支援活動を各国政府やNGO（非政府組織）、地域団体と協力しながら活動しているNPO法人です。私たちの活動は、主に企業・団体・個人の皆様からTMATの会員として資金協力していただくことで支えられています。ぜひ、ご協力ください。

正会員年会費 …… **10,000円**
個人賛助会員年会費 …**1口　3,000円（1口以上）**
団体年会費 ……**1口 30,000円（1口以上）**

クレジットカードによるご協力

http://www.tmat.or.jp/donate_on_the_credit/

※VISA/MASTER/JCB/AMEX/DINERSの各種カードがご利用いただけます。
※提携カードでは、お取り扱いできない場合があります。

振り込みによるご協力

振込先口座
- 郵便口座記号番号：00170-4-564249
- 銀行名：ゆうちょ銀行
- 金融機関コード：9900　■ 店番：019
- 預金種目：当座
- 支店名：〇一九（ゼロイチキュウ）店
- 口座番号：0564249
- 受取人：特定非営利活動法人 TMAT

各種SNSで情報発信を強化！

TMATは国内外への支援活動を積極的に展開するとともに、それら活動内容に関する情報発信の強化にも取り組んでいる。TMATは寄付協力を活動原資としていることから、多くの方々に活動状況を知ってもらうため情報発信することは、重要な活動のひとつと言える。

従来から運用している公式ホームページやFacebookに加え、2023年にはInstagramを新たに開設。さらに、徳洲会グループの公式YouTubeチャンネルである「徳洲会TV」では、TMAT活動記録動画を配信。現在は能登半島地震支援活動の記録動画を公開中だ。

なお公式ホームページでは、06年6月に発刊したTMATニュースダイジェストの第1号から、すべてのバックナンバーをPDFで公開。TMATへの入会や募金方法もホームページに記載している。

Instagramで情報発信もスタート

Instagramへのアクセスはこちら

Facebookへのアクセスはこちら